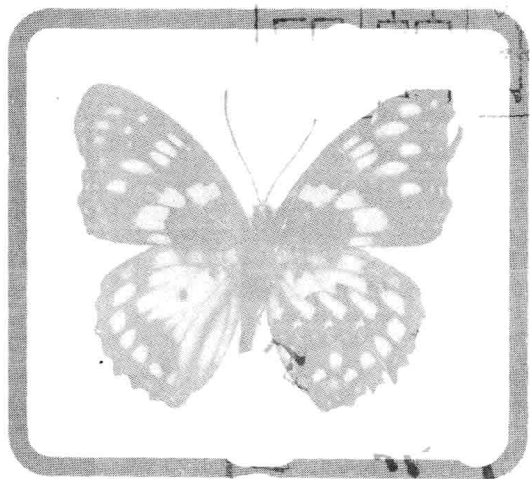


短い夏

柏原兵三

短い夏

柏原兵三



短い夏

昭和四十六年五月三十日 第一刷

著者 柏原兵三

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三

郵便番号 一〇二一

電話 東京(〇三)二六五一二二一

振替 東京七八七四三

印刷 大日本印刷

製本 加藤製本

定価 七〇〇円

万一落丁・乱丁の場合は
お取替えいたします。

Printed in Japan

© 1971 Hyozo Kashiwabara

目次



飛行機事故

203

スウイミング・プール

181

指輪

159

引越し

125

驛

89

外套

61

短い夏

5

從兄の上京

241

蜂の挿話

255

齒の話

273

ミシシッピ河のほとり

295

ヴァイマル行

311

あとがき

355

装
幀

栗
屋

充

短
い
夏

第一章

夏休みが始まった日が丁度土曜日だった。僕は夏休みを一日も無駄にしてはならないと考え、その日の午前中の汽車で、しかもなるべく早い汽車で行くつもりでいた。それなのに寝坊してしまい、十一時六分発の汽車でないと間に合わなくなってしまった。けれども家を出ようとする段になって、僕は駅を降りてからの道をはっきりと確かめておかなかったことに気がついた。子供の頃一度遊びに行ったことがあるだけに、道ははっきりと分っているつもりでいたのである。こんな風に土壇場になって故障が出て来るのは、僕の精神状態が衰弱している証拠だった。故障が出て来るといっても、僕の方で勝手に故障を作ってしまうようなところがあるのだ。今度の場合もそうだった。

公彦さんに電話をかけて聞けばいいのだ、ということに気づくと、僕はそんな故障を大袈裟に考えたのが莫迦莫迦しくなって来た。

公彦さんは、僕がこれから行って夏休みを送ることになっている別荘の持主である宗像のおばさんの長男であった。彼はついこの間まで僕の父が経営する会社の一つで働いていたのだが、その会社がうまく行かなくなつて同種の会社に吸収合併されてしまつてからは、その新会社に移っていることを僕は知っていたのだ。

職場に電話をかけると公彦さんはすぐ出て来た。公彦さんは僕の話聞き終ると早速、それは丁度いい、一緒に行きましよう、といった。公彦さんも土曜から日曜にかけて、会社の同僚たちを連れて別荘へ遊びに行くのだというのである。そして公彦さんは一時十八分の汽車に乗つて行くつもりだから一時に両国駅の房総線のプラットホームで落合おう、と僕の都合を聞こうともしないで独りで話を決めてしまった。

電話を切つてから、僕は公彦さんのいうなりになつてしまったことを後悔した。公彦さんと一緒に行くというのはいいとして、見も知らぬ公彦さんの会社の同僚たちと一緒に行くのはまったく気乗りがしなかつた。しかしそうだからといって電話を再びかけて断わることが自分にできないのを僕はよく知っていた。このように意志力に欠け、すべてのことに逡巡するのも最近の僕の悪い傾向の一つだった。

昼過ぎ母に送られて玄関先で靴を履いていると、自動車が門の前に停る音がした。父が帰つて来たのだ。

僕は父に公彦さんたちと同行することになった旨を話した。父は僕の話黙つたまま聞いていたが、聞さ終るなり低い声で怒つたように、

「一緒に行くのは止めろ」といった。

「どうしてですか」と僕は驚いて問い返した。

すると父は短く、公彦たちは遊びに行くのだ、そういう遊樂気分はせっかくのお前の勉強をしようという気持を駄目にする、これから電話をかけて断わりなさい、といったきり、僕の返事を待たずにさっさと靴を脱いで上って行ってしまった。

そして僕は、出発を一日延期してしまっていたのである。拍子ぬけしたように。

あくる日僕は出掛ける前に父の書齋に呼ばれて、受験勉強は苦しいかも知れないが、一つの試練だと思ってしっかりやって来い、もしも気に入ったら休み一杯滞在したらいいだろう、お父さんも高文を受ける時にはお寺に籠って勉強したがそれは効果的だった、という話を聞かされた。

いつ頃向うに着くのか、という間に、五時半頃ですと答えながら、僕は、きのう父の一方的且理不尽な阻止に出遭わなければもう今頃は大分落着いて勉強に取りかかれた時分だろうに思ったが、もうそのことで父を怨んでいなかったし、父のいうなりになってしまった自分の不甲斐なさを自分に責めてもいなかった。何しろ僕はこれから立つことができるのだし、確かに昨日立っていたら父のいうように僕の夏休みに寄せた新鮮な期待はみんなの遊樂気分ですべて汚されてしまったかも知れないのだと思えたからである。

そして僕は父のはなむけの言葉に心が打たれるのを意識していたが、その一方僕の心はこれから自分が挙げて来ようとする成果にひどく覺えない気持を感じ、父の言葉を負担におぼえないわ

けには行かないでいた。

一時前に僕は両国駅のプラットホームに着き、二十分前に入って来た両国一時十八分発の汽車に乗り込んだ。発車まで時間があるせいとか、それとも日曜日のこんな時刻に房総へ出かける乗客は余りいないのか、汽車に乗り込んだ客は数える程しかなかった。僕は綺麗な車輛を求めて暑さに蒸し蒸しとする車室から車室へと、重い黒皮のトランクを座席にぶつけながら渡り歩いたが、どの車室も申合せたように薄穢かった。広い一枚ガラスを使わないで、縦に棧が入って二枚のガラスが填められた旧式の窓も、ガラスに罅が入っていたり、割れたままであつたり、板が打ちつけてあつたりで、ひどく無残な状態にあつた。座席は背の部分が板で、シートも垢で黒光りしており、中には発条が飛び出ていたり、切り剥がされた部分を麻袋で補綴してあるのもあつた。

僕は翌年の大学の試験にまったく自信がなかった。夏休み前に初めて本格的な大学入試の模擬試験が行われたが、僕の得た成績はひどいものだった。数学は解析ⅠⅡを選んだが零点というていたらくであつたし、理科は化学と生物を選んだが、どちらも四十点に達しなかった。英語も半分位の得点しかなかった。満足なのは国語と、社会で選択した世界史と日本史だけだった。この始末を僕は家に秘密にしていた。そして秘密の裡に葬り去ってしまうつもりでいた。なぜならこの夏休みを通じての激しい勉強によって僕は遅れを取り戻すつもりでいたから。夏休みが終ると間もなく第二回の模擬試験が行われる筈だった。その試験で来春の大学受験に関してはもう大体の線が決つてしまうというのである。

四番目に移った車室で、僕は比較的綺麗な緑色の天鵝絨の座席を見つけ、そこに坐ることに決

心した。

本でずつしりと重い黒皮の大きなトランクを網棚に載せ、風を入れるためにあたりの窓を開け放したのち、僕はようやく座席に腰をおろした。そして顔の汗をぬぐったのちしばらくぼんやりしていたが、そのうちに僕は電撃にでも打たれたかのように居ずまいを正した。こうしてはいられないと思ったのである。僕は苦心して上げた重いトランクを再び下ろした。トランクを開けると「重要英単語八千語集」という本が目にとまった。僕はそれを読むことに決めて、その本を取り出すとまたトランクを元に戻した。

僕は自分の英語のヴォキャブラリーを精々四千あるかなしと踏んでいた。それをこの夏休み中に一気に七、八千語の線まで持上げなくてはならないと思って、持って来たのがこの本であった。単語だけを切離して覚える愚を知らないではなかったが、何しろ僕は焦っていた。非常事態を乗り切るにはそれ相応の乱暴な方法も考えてよいと思ったのである。それにその本の謳い文句には、「文章構造を示して有機的に暗記できる」とあったから、僕の方針はそれ程乱暴でもないのかも知れないのである。僕はこの本を二週間で上げてしまうことに予定を組んであった。

まずaの部分から僕は読み始めた。知らない単語がほとんどであった。不安な思いが僕の心に募った。こんなに知らない単語ばかりで一体どうなるのだろう。いつの間にこんなに英語の力が落ちてしまったのだろうか……

そのうちにだんだんと車内の席がふさがって行つた。僕の前にも書類鞆を持った中年の男が腰かけた。彼は書類鞆を網棚に載せてしまうと、ポケットから買ったばかりらしい株式新聞を取り

出して読み始めた。やがて彼の隣りに籠背負いのおばさんが腰掛けた。彼女は僕の隣りに空籠をのせた。

長い間鳴り続けていたベルが止み、汽車ががたんといつて走り出した時、僕は自分がひそかに抱いていた期待が完全に破られたことを知ってがっかりした。僕はそれを受験生にふさわしくない期待と断じ、そんな期待を抱いていることを心ひそかに恥じてもいたのだったが、そうした期待を抱いていたことは確かに事実であったのだ。僕は自分が恋するにふさわしい少女が、房総に避暑に赴くためにこの汽車に乗り込み、僕の隣りに腰かけることをそれまで心ひそかに夢想していたのである。しかし現実には僕の隣りには美しい少女が坐っているのではなく、乾した魚の匂いのする空籠が載せられてあるのだ。

僕は車窓から東京の街を見ながら、愈々これで東京とはしばらくの間お別れだなと思うと、ちよつと悲愴な気がした。しかし東京を離れるといっても、僕がこれから訪れる外房総長者町は両国から汽車で僅か三時間で行ける所だったし、長く滞在するといっても精々一カ月余りしかないものである。僕はすぐにそんな気になった自分が恥ずかしくなり、「重要英単語八千語集」の頁に再び目を落し、その本を読むことに専念しようとした。

汽車が走り出してからは、風が入って涼しかった。僕は風に吹かれながらしばらくの間「重要英単語八千語集」を読むことに精神を集中させていたが、間もなく大きな鼾が僕の精神の集中を著しく妨げるのに気がついて、本を読むのを中止した。鼾を立てているのは僕の斜め向いに坐った籠背負いのおばさんであった。彼女はうわばみのような鼾を立てて寝込んでしまったのである。

汽車の中では窓外の景色を楽しむべきだ、勉強は向うに着いてから始めても遅くはないと僕は心の中で弁解しながら、本を閉じて隣りの空籠のそばに置き、窓の外を眺め始めた。

窓の外はいつの間にか一面の田畑に変わっていた。稲の緑が暑そうだった。畠の野菜の蔭に、手拭いで顔を蔽って、葉を噴霧器で撒いている農夫の姿が見えた。

しかしものの五分と経たないうちに、僕は再び本を取り上げて、続きを読み出した。そうしながら僕は籠背負いのお婆さんの軒がいつの間にか止んでいることに気がついた。目を遣ると、その代りに彼女は今度は天井に顔を向けて、口を半分開けて眠っているのだった。よだれが口の端から垂れ下っている。

「受験勉強ですか」といつの間にか新聞を読むのを止めて、煙草をふかし始めた僕の前の男が、僕に話しかけて来た。

「ええ」と僕は答えた。

「高等学校はどちらですか」

僕は自分の通っている高等学校がどこであるかを示すものを何も身につけていなかった。つまり僕は帽子をかぶってもいなければ、徽章もつけていなかったから、彼は僕の学校を知りたいと思えば、それを僕の口から確かめざるを得なかったのである。僕らの学校が余りに名高い存在であるために、そのように無名の存在を気どることが終戦後二、三年頃から僕らの間に流行り出したのだったが、そして僕もその傾向に従った一人であったが、それは至極スノビッシュな、気障な、底の浅い反抗に過ぎなかったようである。というのは、この頃再び僕の周りでは帽子をかぶ

ったり、徽章をつけたりすることが普通になって来ていたからである。少くともそうした例が目立ち始めて来ていたのである。もはや古のものとなってしまった流行に未だに忠実なのは少数のアウトサイダーに過ぎなかった。そして僕はその少数のアウトサイダーに属していることを光栄と感じていたのだったが、しかしこの頃になってその少数者の一員であることが不安に思われるようになって来たことも事実だった。僕は受験体制に順応しよう、たとえ一時的でも頭を下げて順応しよう、と思うようになっていたのだ。そしてその表われが、この夏休みを受験一色に塗り潰すために、これからこうやって自らを籠らせるために出かけて行く旅なのだった。ただ敢えて帽子もかぶらず、徽章もつけて来なかったことが、僕が僅かながらも保っている反抗的な姿勢であつたが、しかしそれは僕の最近の狼狽した大勢順応への傾向を考え合せると、過去の生き方の哀れむべき残滓に過ぎなかったかも知れない。そのことを僕は自分でもよく知っており、そして恥じていた。

男は僕に彼の質問がよく聞きとれないと思つたのか、再び同じ質問をしかけて来た。

僕は嫌々ながら、しかし僕の答が相手の心に惹き起す反応を期待する、卑しいと僕に感じられるアンビヴァレンツな感情をもって、僕がその生徒であるところの高等学校、東大合格率日本一を誇り、それ故に日本で一番いいとされているところの学校の名前を告げた。

「ほほう」

僕の子期した通りの返事が戻って来た。

「秀才校ですね」

僕は不機嫌に黙り込んでしまった。僕はその秀才校の劣等生であった。嘗てその学校でもとび切りの秀才に属していたのだったが、長い歳月のうちに（最後の旧制中学生としてその学校に入った僕は学制改革に伴って新制高校に昇格したその学校に六年間もいたのであった）劣等生になり下っていたのである。そして僕はその経過に必然的なもの、僕の内面に由来する誇らしい必然性を認め、昂然とし、自分の道を歩むのだという気概に生きていたのだったが、それがいつの間にかがたと崩れ始め、バスに乗り遅れまいとする卑怯で憐れむべき変節漢となっていたのである。しかもその時は遅かった。謂わばバスは発車してしまっていたのである。僕は追いつこうとしてバスの後から息せき切って走っている哀れな存在だった。そしていつの頃から神経衰弱のような状態に陥ってしまったのである。僕はすべてに自信を失い始め、行動に安定性を失い、集中力を失い、些細なことで打ちひしがれ、顔がすぐ赤くなり、人なかに出るのを怖がるようになっていた。その原因をごく手近に求め、自瀆の悪習のせいにしていたが、原因はもっと根深いところにあることを僕は知っていた。それは僕の首尾一貫しない生き方であったのである。僕は大学に入った暁には、自己の内面の欲求に忠実な生き方をしようと思っていた。そして現在の時をそのような生き方を許されるまでに過ぎなければならぬ仮りの時であろうと思ひ込もうとしていた。しかし仮りの時を果して来年の春を以て終えることができるであろうか。もし終えることができたと仮定して、その後真の生き方を僕は推し進めて行くことができるであろうか。所詮僕は贗物ではないのか。そうした疑問が次々と僕に襲いかかり、限りなく苦しめて止まないものである……